

4.2. 旧中学校生徒寄宿舍を活用した交流拠点「たんぽぽハウス」

活動分野	地域交流 生活支援	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体・知的・精神	年齢	18歳以上
活動地域	熊本県 阿蘇郡西原村	実施主体 [NPO]	名称:NPO 法人 にしはらたんぽぽハウス 住所:熊本県阿蘇郡西原村小森 3264 電話/fax:096-279-3666		

活動概要

西原村役場の西隣りにあった旧西原中学校生徒寄宿舍を清掃、改修して、三障害共生型の自立支援センターとして活動しているほか、障害の有無を問わず、誰もが気軽に立ち寄れる地域交流の場として開放しており、子どもから大人まで地域住民のちょっと一服の場所としても利用されている。

- ・**ワンコインランチ**:自分たちで育て、収穫した農作物を使い、毎週金曜日に週替わり定食を 500 円で提供。スタッフやボランティアの指導のもと、障害のある人が接客や盛りつけ、配膳などを行っている。一人暮らしの高齢者や子育て中の母親など地域の人たちも気軽にランチを食べに来ており、障害のある人と日常的にコミュニケーションを図っている。
- ・**米作り、野菜作り**:地元農家の協力を得ながら、自然農法、無農薬にこだわった農業活動を行っている。障害のある人がスタッフやボランティアと一緒に農作業をし、収穫したものを麦味噌や梅干し、玉露茶、きな粉、芋ようかんなどに二次加工して「たんぽぽ製品」として販売している。
- ・**児童との交流**:村内の保育園や小・中学校と連携して、夏休みにハウス内で西原村社会福祉協議会と共同でワークキャンプを開催するなど、障害のある人たちとの交流を図っている。たんぽぽハウスのことを知ってもらい、子供達が気軽に立ち寄れる場となるように心がけている。
- ・**イベント**:障害の有無に関わらず、皆が参加できる料理教室や陶芸教室などをハウス内で頻繁に開催。また、村のバザーや夏祭りなどの行事にも積極的に参加し、障害に対する地元住民の理解を深めている。



活動を始めた背景・経緯

2004年に西原村社会福祉協議会の呼びかけで、県の地域の縁がわづくり推進補助事業として「バリアのない村づくり」という村民参加のワークショップが行われ、「場づくり」「心づくり」「仕事づくり」の三つのテーマについて話し合いが行われた。西原村では当時、四つのボランティア団体が個々に活動していたが、村民の協力のもと、それらが一つにまとまって活動拠点となる作業所「にしはらたんぽぽハウス」を開設した。

その後、2008年8月にNPO法人格を取得。さらに、2009年4月には旧生徒寄宿舍の建物を利用し、加工場を伴った「新たんぽぽハウス」が完成した。地域活動支援センターとして、地域との体験交流や訪問活動、障害学習会などの事業にも取り組んでいる。

活動目的

西原村に居住する身体障害、知的障害又は精神障害のある人たちが協力して「居場所づくり」「生きがいづくり」「仕事づくり」を目標に活動することにより、家に閉じこもることなく、地域の中でいきいきと自分らしく暮らせるよう、地域との融和を図る。

また、地域住民との交流を深めながら活動をすることで、障害のある人の社会参加を促し、障害のある人が社会性を身につけ、自立していくことを目標とする。

ハウスのスローガンは「あせらず」「いそがず」「あきらめず」。

障害の有無や種類に関わらず、村内の一人暮らしの高齢者や子育て中の母親、子どもたちにも気軽に遊びに来てもらえるような誰にでも開かれた「地域の縁がわ」「あったかい家」となることを目指している。

活動の成果又は効果

ボランティアを「応援団」と呼び、彼らを巻き込んで活動することで、地元住民の「たんぼぼハウス＝我が村のセンター」という認識が強くなった。これにより、年間を通して行っているアルミ缶や古新聞紙などの回収量が毎回増加し、ハウスの貴重な収入源となっている。

年間を通じてさまざまな行事を実施しているが、障害のある人と地域の人たちとの交流が進んだ。ハウスが役場のすぐ隣りにあるため、役場の帰りにふらりと立ち寄る人が増えており、ようやく認められるようになったと感じている。

ワンコインランチに関しては、当初は1日10食限定だったが、家庭的な味が評判となって注文が徐々に増えている。弁当を含め、今では毎回18食近くを販売している。

活動を継続する上で工夫した点

- ・オープン当初は試行錯誤の連続で、自分たちの進む方向性を見いだすことがなかなかできなかったが、核となる人物(施設長)を置いたことで、スタッフやボランティアのモチベーションが高まり、「ものを作って販売しよう」という目標が明確になった。
- ・以前の施設では保健所の許可が下りなかったため、加工食品を作るという念願を叶えるべく現在の場所に移転。加工所としての活動が可能になった。
- ・製品の完成度を高め、他との差別化を図るべく、地場の原材料や、自然栽培、無農薬であることに徹底的にこだわっている。
- ・「にしはらたんぼぼハウス通信 ゆるっと」を年4回発行し、活動報告や告知を掲載。地元住民へのさらなる周知に努めている。



活動を継続する上での課題

障害の種別に関わらず、どんな人でも受け入れていきたいと考えているが、小さな村ということもあり、依然として障害(特に精神障害)のある人に対する偏見が根強い。

「障害のある人のための施設」という印象があるのか、「ハウスに行かせると、周囲の目が気になる」という家族のガード、バリアが強い。そのイメージをいかに払拭し、自宅しか居場所のない人々(障害者手帳をもらうまではいかない、グレーゾーンの人たちを含む)をすくい上げていくかが課題である。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

北海道上川郡にある「共働学舎新得農場」のように、障害のある人とない人とが共に働き、学び、生きる場所にしたいと考えている。今後は農業の延長として養鶏場を作り、さまざまな仕事を分担し、助け合いながら、地元住民とも連携を図っていきたい。

実施体制

職員(施設長、指導員)2名、そのほかボランティア多数

キーワード

共に働き共に学ぶ、地域貢献、相互協力



43. 商店街の空き店舗を活用した障害のある人と地域住民との交流サロン

活動分野	地域交流、生活支援	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体・知的・発達	年齢	65歳未満
活動地域	熊本県 天草市、上天草市 及び天草郡苓北町	実施主体 [NPO]	名称:NPO 法人 ステップバイステップ 住所:熊本県天草市中央新町 13 - 12 電話:0969-22-6507 fax:0969-24-4013 URL :http://stepsiroikumo.blog49.fc2.com/		

活動概要

中心商店街の空き店舗を改修して以下の店舗を展開し、特別支援学校や特別支援学級に通う児童の居場所や楽しく働ける就労の場として提供するだけでなく、保護者や地域住民が日常的に集い、交流できるサロンとして開放している。障害のある児童・人もレジ対応や販売、配達などを行いながら、地元高校生を始めとするボランティアスタッフやお店にやって来る地域住民と交流している。

- ・**みやおみやおベーカリー**: 国内産・無添加の材料にこだわり、障害のある人もパンやケーキ、クッキーなどを製造して、焼きたてを店頭で販売するパン屋さん。
定期的に養護学校への出張販売なども行っている。
- ・**Café Another Page**: 商店街にある天草宝島国際交流会館「ポルト」にオープンした喫茶スペース。
障害のある人が、みやおみやおベーカリーで作ったスイーツや飲み物などを提供するほか、レジ対応や後片付け、会館内の会議室への出前なども行う。
店には、子どもから高齢者まで年齢を問わず地域住民が訪れ利用しており、共生社会の実現を目指した日常的な交流の拠点となっている。
- ・**八百すて**: 地域の農家(約 30 軒)と連携して、常時数十種類の野菜を取り扱う八百屋さん。
障害のある人も農家の人たちの持参した野菜の袋詰めを手伝ったり、商品の補充やレジ対応などを行う。



店舗を運営しているステップバイステップでは、そのほか地域生活支援事業として、日中一時支援事業や移動支援事業、福祉有償運送事業を実施している。

活動を始めた背景・経緯

20年程前、天草市に知的障害者通所授産施設「かしのき学園」が開設されたが、定員が少なく、特別支援学校や特別支援学級を卒業した障害のある児童たちの受入先が非常に限られてしまっていた。

福祉施設に入所するか、自宅で過ごすしか選択肢がない中、障害のある児童の保護者から「自宅から通える場所で地域と交流できるような場が欲しい」という声が高まり、社会福祉法人「白い雲の会」(市内の医療関係者や教員、障害のある児童の保護者で設立した団体)のメンバーによって、ステップバイステップを2004年5月に設立し、2007年4月にみやおみやおベーカリー、Café Another Pageを、2008年8月に八百すてをオープンした。

活動目的

障害のある児童・人の自立、社会参加を促し、障害のある児童・人及びその家族や地域に暮らすあらゆる人々が生まれ育った地域の中で当たり前の生活を営んでいけるようになることを目指している。

活動の成果又は効果

近くに大型スーパーがあるにも関わらず、わざわざ足を運んでくれるお客が徐々に増え、ようやく地元の住民に認められるようになってきており、少しずつだが手応えを感じている。

天草も、大型店舗の出店や少子高齢化の影響によって商店街を取り巻く環境は年々厳しくなっており、店舗の廃業や撤退が相次いでいる。空き店舗を利用することで地域が活性化し、「閑散としていた商店街に賑わいが戻った」「治安が良くなった」との声も。さらに、自動車が運転できず、郊外型の大型店舗まで行けない高齢者や女性にも便利さが受け、たいへん喜んでもらっている。

また、地元の人たちが気軽に訪れる場所となったことで障害のある児童・人との相互交流が進んだ。家族や周囲からは「(障害のある児童・人は)これまで、限られた人としてしか話す機会がなかったけれど、いろいろな人との会話を通して、彼らに笑顔が戻り、顔が明るくなった」という声が多く寄せられている。



活動を継続する上で工夫した点

- ・職業体験の場として地元の小・中学生の受入れも行っており、また、高校生のボランティアとも積極的に交流している。障害のある人の家族や高齢者だけでなく、地域の子どもや若者にも親しみやすいサロンになるよう心がけている。
- ・パンや野菜は出張販売を行っているが、バザーなど地域のイベントには必ず出店し、障害のある人とない人が日常的に触れ合うことを大切にしている。
- ・話すことが苦手な知的障害のある人などと周囲の人たちをつなぐ「コミュニケーションボード」や、買い物をする際の手助けとなるパンフレットを、ツタヤやコンビニなどの店舗に配布し、障害のある人が意思疎通しやすくなるよう地域全体でサポートしている。また、知的障害のある人本人にも名前や住所、連絡先などを記載した「SOSカード」を携帯してもらうことで、緊急の際にも地域ですぐに対応できるようにしている。
- ・熊本県の委託を受け、啓発DVD「全ての人が地域の中で」を制作。天草ケーブルテレビで定期的に放映してもらい、市内の小・中学校や自治会、行政機関、各種団体へも配布した。障害のある人への理解がさらに深まり、「全ての人が、生まれ育った環境の中で、当たり前な生活を営んでいければ」と考えている。



活動を継続する上での課題

NPO 法人という形態で活動しており、自由な発想で活動できるという利点があるが、一方で、税制面での優遇措置がなく、次の事業に展開しづらい。

柱となる事業がないと運営が難しく、また、助成金だけでは事業展開できないため、安定した財源を確保すべく、できるだけ国の障害者施策に則った事業展開を行っていくことを考えている。だからこそ、国の施策や制度変更に関しては、常にアンテナを張り巡らせ、素早く行動できるように心がけている。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

2012年4月からは児童デイサービスとグループホームを開設する予定である。

また、農家の高齢化が急速に進んでいるが、障害のある人の就労のための農業実習の受入れに関しても地元農家へ積極的に働きかけていきたい。

今後は、障害のある人々のニーズ以外に、地域の要望をも把握し、福祉と地域社会との結びつきをさらに強めていきたい。天草には工場や大企業がなく、障害のある人を一般就労に結びつけるのは難しい。「高齢化が進む農家」と「働く場を求める福祉サービス」、「栽培のノウハウを持つ生産者組合」と「運営基盤を持つ福祉施設」が垣根を越えて連携を取れるようにし、福祉の立場だけでなく、地域の産業にも貢献していきたい。

実施体制

看護師や生活支援員、職業指導員、ボランティアなど 18 人(2012年4月からは 20 人)

キーワード

本人主体、地域貢献

